『クリオ』17号（2003年）35～46頁

インタビュー：桜井万里子教授に訊く

Section1：歴史研究者への歩み

生い立ちと子供時代

クリオ： 今回のインタビューでは、歴史家がどのような時代に生きてきたのか、またその中での歩みが現在に至る歴史研究にどのように反映されているのかということをうかがっていきたいと思います。まず、大学入学以前に現在の研究へとつながるような学問的な関心の芽生えがあったのでしょうか？

桜　井： 全然ありませんでした。本を読むことは好きだったのですが、読書指導をしてもらったという記憶はなく乱読で、『赤毛のアン』と太宰治の『人間失格』を一緒に読んでいました。家庭環境も特別なものではなく学者の家でもありませんでした。

私の父は昭和16年に東京商大を出て北支開発に就職し、母と結婚して北京に渡りました。母は私が生まれる時に一度東京に戻り、昭和18年秋に再び北京に渡りました。そしてそこで終戦を迎え、昭和21年春に引揚者として日本に戻ってきました。敗戦でこの会社はなくなり、父は友人とともに新たに会社を興してその事業を手伝いましたが私が小学校5年生の時に下町の墨田区で独立して町工場を始めました。

戦後に引揚者として戻ってきた時のことは全然覚えていないのですが、まず母の田舎の大分県日田に数ヵ月、父の田舎の島根県宍道に1年くらいおりまして、それから母の実家がある東京世田谷区の九品仏に2年ほどおり、その後吉祥寺に移りました。そこで私は幼稚園と小学校に通いました。住んでいたのは井の頭公園のすぐ近くでした。貧しかったので父の友人宅に間借りして住んでいまして、井の頭公園が私の遊び場でした。そして小学校1年の3学期に吉祥寺から町田に移って、5年の2学期の終わりまでそこにおり、それから墨田区に移りました。そこで私は区立の中学校に行き、都立の両国高校に入りました。

母は、私が小さい時に絵本をたくさん買って読み聞かせたというのですが、残念ながら憶えていません。それから九品仏の祖父母の家の本棚に母や伯父が昔読んだ本が残っていまして、その中から面白そうなものを選んで読んでいました。後で分かったのですが、それは『小学生全集』というもので、昭和の初めに菊池寛が始めた小学生用の全集で、全部ルビが振ってあったのでそれで漢字などは覚えることができました。多分私はかなり早く文字が読めるようになっていたので、そういうものを読んで面白いなと思うようになったのだと思います。旧仮名遣いもごく自然に受け入れていました。また小学校時代は貧しい時代でしたから、月に1冊本を買って良いといわれて毎月心待ちにして本屋で本を選んだり、近くの公民館の図書室で子供用の本を借りたりしました。

下町の墨田区に小学校5年の3学期から移り、そこから両国高校に通い、さらに国際基督教大学（ICU）へと進みました。父が町工場を始めまして、そこに中学を卒業したばかりの人たちが就職してくるわけです。青森とか北海道から。すぐそばで接していて、自分と同じぐらいの歳の人たちが働いているのです。そうした中でいささか後ろめたい気持ちがありました。確かに私も仕事を手伝いはしたのですが。たとえば私が高校に進学した時、中卒でや

ってきて昼間働きながら夜間の高校に通うという同い年の人もいました。そうした社会の矛盾というものを多分その時感じていたのだと思います。とはいえ国立大学をどこも受験しないでICUに行きたいと思って受験して入学したり、『赤毛のアン』を読みながら太宰治を読むといった矛盾が自分の中にはあったのだと思います。中学の時は宝塚に夢中になっていましたし、大変ナイーブというかおよそ学問に目覚めるような環境でもなかったし、自分自身もそういう世界があるということすら知らなかったのだろうと思います。今振り返ってみると、後々にこういう研究を始めて様々なテーマを設定していくことと、この時期に町工場で働いていた人たちとの接触が、何か関係しているのかもしれないとは思います。

大学学部時代

クリオ： それでは次に先生が国際基督教大学に入られてからのことについてお尋ねしたいと思います。大学入学後に先生はいろいろな先生、友人、あるいは書物と出会ってきたと思うのですが、その中で影響を受けた人や本はありましたでしょうか？

桜　井： ICUに入って、ようやく知的世界が自分の前で開けてきたという感じでした。高校は受験校でしたから楽しい高校時代ではなかったのです。ICUでは西洋古典学と聖書学の第一人者であった神田盾夫先生が人文科学分野の一般教育科目を担当してらっしゃいまして、それは必修科目でした。神田先生はホメロス、旧約聖書の「イザヤ書」と「ヨブ記」、ソフォクレス作『オイディプス王』、そして新約聖書の「マルコ伝」をテキストとしてお使いになりました。私にとってそれらは初めて読むもので、大変興味深くいろいろと啓発されました。だからといってそれらを専門的にやろうとかギリシア語を勉強しようとは思いませんでした。私は英文学専攻で、当時ICUには斉藤勇先生という英文学の大御所の方がいらっしゃいまして、この先生の下で英文学を専門にやろうと思っていました。ですからギリシアやキリスト教に関する勉強はそれ以上進まなかったのです。しかしその後私には文学は向いていないと感じるようになりました。文学の研究方法というのが当時は何か納得できなかったのです。それでも卒業しなければならないと考えて卒論を書いて卒業しました。しかし私はモラトリアム人間の走りで、卒業してすぐに就職すべきかどうか皆目検討がついていませんでした。たぶん社会がどんなものなのかも分かっていなかったのです。

一方で4年生の時には歴史は面白いと感じて歴史の授業を受け始めました。アメリカ史の本間長世先生やドイツ史の魚住昌良先生が非常勤でいらしていたのでその講義を聞いたりしていましたから、3年の終わりか4年の初めには歴史の勉強をしたいと思ったのだと思います。けれども大学院を受けるだけの準備はしていないと思いましたし、研究者になろうなどという気は全くなかったので、学費のことも考えて学士入学を募集している国立大学を探し、東京教育大学を受験して合格し、そこに入学しました。

東京教育大の西洋史学科の3年に編入し、当初はイギリス史をやろうと思っていました。ちょうどICUの4年生の時（1965年）に生協設立運動が始まり、それは1968年に始まる大学紛争の先駆けだったと思いますが、学内はとてももめました。特に私は寮に入っていたので、寮で徹夜で議論しましたし、バリケードをはって建物に閉じこもるということもしました。その時期の動きが影響しているのかもしれませんが、イギリス史でフェビアン協会についてやろうと思い、教育大に入りました。

そして単位をそろえるために、4 月にギリシア史の講義を取りました。それが非常勤講師でいらしていた岩田拓郎先生（当時明治大学助教授）の講義でした。それがとても面白く、これはもうギリシア史を勉強したいと思い、3 年生の秋に岩田先生に相談しました。その時の講義は、C. Hignett, *A History of the Athenian Constitution*, Oxford, 1952 をベースにアテナイのアルカイック期から古典期の国制の変遷を扱ったものでした。私は卒論をギリシア史で書こうと思うようになりまして、ギリシア語を勉強し始め、岩田先生にも卒論について相談しました。イギリス史を勉強するために学士入学したのにすぐギリシア史に変えてしまうというのは、いかに私の意識が低かったのかということの表れなのですが、幸い私にとってはよい巡り合わせでした。

この時ギリシア史を面白いと思ったのは、おそらく神田先生の講義を聞いていろいろなものを読んでいたということがあったからだと思います。自分自身でどこまで自覚していたのかは分かりませんが。神田先生は、ヨーロッパ文化の源流であるヘレニズムとヘブライズムの両方を講義されたのですが、私自身がより身近に感じたのはヘレニズムの方でした。それで岩田先生の講義を聞いたことで、急に歴史学としてギリシアを学ぶことが可能なのだということを知ったのです。

それからはギリシア史で卒論を書こうとしてクセノフォンの『オイコノミコス』を読み、その史料から紀元前 4 世紀のアテナイについて考えるということで、タイトルは「紀元前 4 世紀アテナイの経済事情」にし、農業を中心に扱いました。岩田先生の指導で、史料をきちんと読んでそこから当時の社会あるいは歴史像を築かなければならないと考え、やっと文法の初歩を当時西洋史学研究室の助手をしていらした鈴木一州先生の個人指導で勉強した後に、自分でその『オイコノミコス』をギリシア語とフランス語を対照させながら読みました。ちょうどその時、哲学科の非常勤講師としていらしていた廣川洋一先生の演習に出て『オイディプス』を読み、秋からはヘロドトスを読みました。

東京教育大での 2 年間はとても有意義なものでした。2 年間で卒論を書き、そしてもう少し勉強を続けたいと思って東大の西洋史の大学院を受験しました。その時は古代ギリシア史の研究だったら東大だろう、岩田先生も東大のご出身でしかも村川堅太郎先生がいらっしゃるということで受験いたしまして、幸い合格しました。私が入学した時には村川先生は退官なさっておられましたが、その後お家に呼んでくださってお話をしてくださり、個人的なご指導はしていただきました。ですから、大学時代の影響というのは、無意識には神田先生、実際には岩田先生の講義を受けたというのが決定的であったと言えるでしょう。

クリオ： 文学を最初やっていてそれから歴史学の方に変わられたわけですが、やはり歴史学の内容なり方法論なりに魅かれるところがあったのでしょうか？

桜　井： かつて神田先生は、キリスト教によってはじめて歴史的時間が明確に自覚されたと講義されました。世界は神によって創られ、そして終末を迎えるわけですが、人類の歴史がその終末に向かって動いていくという鮮明な歴史意識がキリスト教にあるとお話になったわけです。そこで私は人間の存在というのは歴史的なものだということを強く意識したのです。

クリオ： 卒論はなぜそのテーマにしようと思われたのですか？

桜　井： 岩田先生に言われたからです（笑）。フィンリーの *Studies in Land and Credit in Ancient Athens (500-200 B.C.)* が出てから約 10 年、岩田先生の論文や馬場恵二先生、伊藤貞夫先生の論文などに、フィンリーのことが引かれていたのです。フィンリーの本は絶版で手に入らず、本

を直接読めなかったのですが、諸先生の論文から画期的な研究なのだと知りました。そして岩田先生に経済史の分野で卒論を書きたいと相談したのではないかと思うのです。それでたぶん『オイコノミコス』を読んでみたら、と指導されたのだと思います。ですがどうしなさいとは言われませんでした。私は多分一誠堂で見つけたのだと思いますが、Claude Mossé の *La fin de la démocratie athénienne*（1962）を、500 頁近い本でしたが、必死で読み通してこれを使い、関連論文や、時々『オイコノミコス』を引用しながら、紀元前 4 世紀のアテナイの経済の特徴について書きました。それで岩田先生にお見せしたら、これではだめです、問題がありますと言われました。それ一言だけしかおっしゃいませんでした。それでなぜかなと考えて、こういうやり方ではだめなのだなと思い、それにギリシア語を辞書と首引きでせっかく読んだのだから、この史料をベースにして論文を組み立てるべきなのだろうと思ってすっかり書き直してお見せしたら、これでよいと言われました。だから『オイコノミコス』を使ってみたらというのは、岩田先生のアドヴァイスでした。

クリオ： 経済史的な分野をテーマに選ぶというのは、新しい研究の潮流に参入していこうという気持ちがあったからですか？

桜　井： 当時新進気鋭の岩田、馬場、伊藤各先生方が最近出た画期的な研究としてフィンリーを引用しておられたので、すばらしいのだろうと思っただけだと思います。

大学院時代

クリオ： 次に大学院時代の学問的刺激について何かありましたら教えてください。

桜　井： 友人との交流は少なかったです。というのは、大学院に入学したのが 1968 年 4 月で、6 月にはここがロックアウトになって授業ができなくなったからです。だから大学院修士課程の前半はきちんとした授業を受けていないのです。先生方も大変でしたしね。それから研究室は、ほとんど同数で全共闘系と民青系に真っ二つに分かれていました。

友人としては、古代ギリシア史の片山（小川）洋子さんと桑原洋さんがいらっしゃいました。おふたりがいてくれたので私は恵まれていたと思います。片山さんは大変優秀な方で、学問研究をどうやるべきかについてわきまえている人でしたから、彼女からいろいろなこと随分教えていただきました。私と同い年なのですが、彼女はお茶大を出てすぐにこの大学院に入学したので、私が修士課程に入学した時には博士課程の 1 年でした。片山さんと私とはノンポリで、私達がふたつに割れていた研究室のキャスティング・ボートを握っていたため、他の人たちに呼び出されて説得を試みられましたが、結局、運動には参加しませんでした。

大学院に入った 4 月に私はギリシアについて勉強できる授業を選びました。村川先生がもうご退官でしたから代わりに駒場の秀村欣二先生がいらしてまして、秀村先生はアリアノスのアレクサンドロス伝をテキストに選ばれたのですが、それを読み始めて 1 ヵ月ちょっとで大学が封鎖になり、授業ができなくなりました。哲学科では斉藤忍随先生がトゥキディデスの講読をしていらしたので受講しましたが、先生は場所を変えて、例えば学士会分館や日本信販ビルの部屋を借りて続けてくださいました。堀米庸三先生も学士会分館で中世ラテン語の史料講読を続けていらしたと思います。堀米先生が学部長になられてからは城戸毅先生が代わって続けてくださいました。非常勤講師だった伊藤先生も講義ができなくなり、ご自宅でギリシア語の碑文を読むということになって、桑原さんと片山さんと私の 3 人で週に一度

ぐらい伺い、「ゴルテュンの法典」を読みました。このように制度に従った勉強がほとんどできなくなり、手探りの中で先生方に助けていただきながら勉強したのですが、こうした先生方の学外での授業は6月に授業ができなくなってすぐに始まったわけではなく、この紛争が長引きそうだと思われるようになって始められたものでした。先生方が学生を心配してそういう方法を取ってくださったわけです。

入学してすぐに勉強ができなくなったので私はすごく焦りました。それでこの年から岩田先生が北大に移られたので、私はお願いして夏休みに北大に行き、一対一で碑文を読んでいただきました。今から思うと良くやったなと思います。新幹線も無いし、学生ですからお金が無いので、普通急行の座席で上野から青森まで行き、それで青函連絡船に乗って函館に渡り、そこから札幌まで行くのに 24 時間以上もかかりました。幸い、父の北京時代の友人が北海道出身だったので、その人の紹介で下宿を見つけて そこに 2 週間ほど泊めていただきました。それで北大では岩田先生が M. N. Tod の碑文集第2巻のなかに収められている4世紀の碑文をいくつか選んでくださって、私は午前中、北大文学部の図書室にある LSJ を使って予習して、午後2時か3時くらいから2,3時間ほど先生にご指導いただいて読み、夜下宿に帰ってからは持参した intermediate の希和辞典でまた予習をしてということを10日か2週間やりました。観光はいっさいせず、札幌の町を見物したという記憶もありません。その時は結構がんばりましたね。そういう感じで、正規の大学院指導というのは、特に最初の1年はほとんど受けませんでした。

クリオ： そうした大学院生活の中で、後に論文として発表される「エレウシスの祭儀とアテナイ民主政の進展」(1973 年) の元となる修士論文を書かれたわけですが、そのテーマ設定の理由について教えてください。

桜　井： ここでも岩田先生が関係しています。岩田先生に修論について相談すると、1963 年の *BCH* に発表されたエルキアの供犠暦がおもしろいということでした。しかしそれだけを論文として取り上げることはできないので、まずエレウシスの秘儀という古典期アテナイにとって最も重要な祭儀を取り上げ、その中でエルキアの暦についても触れ、アテナイの宗教に新しい光を当ててみようと考えました。岩田先生や伊藤先生のご研究の影響で碑文の分析が重要だと分かっていましたから、エレウシスの秘儀について調べる際にも碑文をまず読みました。当時ですから翻訳もなく、欧米の研究者の書いた論文の入手も簡単ではありませんでした。アテナイの特に5世紀の碑文を解読し、ヒエロポイオイや他の役職者の役割や祭儀の運営面からこの祭儀を見ていけばいいのではと考えて、手探りでこの論文を書きました。ですからもともと宗教について関心があったということではありません。アテナイ社会について研究する際、伊藤先生、岩田先生、馬場先生は社会経済史的研究をしていらしたのですが、優秀な先輩方がやっていることに自分が参加することはとてもできないと考えて、少し違う角度からアテナイ社会を見てみようと思った、ということはあったようです。ただし、碑文の意義を明らかにしようとするときに、社会経済史的視点を導入していることは、やはり論文を読み返しますと明らかで、先輩たちの影響を大きく受けていたと痛感します。

修論でこのテーマを選んだことは自分にとって幸いでした。ギリシアの社会と宗教の関係について自分なりに考えることができたからです。それからエルキアに関する論文を読む中で、M. H. ジェイムソン先生の論文に出会い、その後 1979 年に彼が日本にいらしたとき、共通の問題意識を持っていることで話が弾み、それでスタンフォード大学に留学することに

なりました。

こうして宗教の研究からはじめましたが、その後、女性や外国人などの非市民へと関心が移動していきました。現在は特殊講義でギリシアの宗教について論じていて、今年で4年目になりますが、今後はこれまでの研究を元に、アテナイの宗教についての研究をまとめたいと考えています。ギリシアの宗教はそれ以降の世界宗教とは全く違いますので、そこにおもしろさがあります。そして欧米の研究者はキリスト教との関係を無意識のうちに考えてしまうのですが、非キリスト教徒の私がギリシアの宗教を研究すればこれまでに気づかれてこなかった古代ギリシアが見えてくるのではないかと思っています。キリスト教の神とは全く異質の神々への信仰を自分のうちに抱えていた古代ギリシア人の社会や文化はかなり独特のものですが、これまであまり顧みられなかった古代ギリシア社会の一側面が描けるのではないかと思っています。

Section2: 研究について

女性・家族研究から他者研究へ

クリオ： それでは次に「古典期アテナイにおける女性の地位と財産権」(1977年) を皮切りに、単行本の『古代ギリシアの女たち』(1992年) へと発展した女性・家族研究の背景についてお聞きしたいのですが。

桜　井： 最初の論文を書いた後も続けてエレウシスの秘儀を研究テーマとしていこうと思っていましたが、ちょうど国連が1975年を国際婦人年に定め、76年から85年までの10年間を「国連婦人の10年」としました。75年が国際婦人年に定められた時、女性の社会参加に関する記事がたくさん出て、ウーマン・リブの運動が盛んになりました。そうした動きを見ていて、古代ギリシア史における女性の地位を研究することはできないかと考え、2つ目の論文を書きました。この論文について書くために勉強したのは75,6年なのですが、そのころはまだフェミニズムの立場からの研究は古代ギリシア史の分野ではほとんどありませんでした。私はこの論文の中で、たとえばA. R. W. Harrisonの *The Law of Athens*, 1971を参照したり、社会経済史的な研究の中で女性について触れているものを参考にしました。古代ギリシアの女性についてフェニミズムの立場からアプローチした最初の、そして画期的な研究は、1975年のポメロイの本 (S. Pomeroy, *Goddesses, Whores, Wives, and Slaves*) でした。ですが当時ですから、私が手に入れたのは論文を書いた後のことでした。このポメロイの先駆的な研究や80年代になって次々に出た古代史における女性研究の影響を私も受けましたし参考にもしましたが、女性に関する最初の論文は今申したように国際婦人年に触発され、社会経済史的な観点から書いた「女性の地位と財産権」でした。ですからこの論文と、後に出る『古代ギリシアの女たち』(1992) ではかなり考え方が違うと思います。

クリオ： では女性史的な視点からの研究の意義をどのようにお考えになりますか？

桜　井： まず当時そうした研究は、日本では他に誰もやっていなかったので、近づきやすかったと言えます。イデオロギーなどを前面に出すのではなく、とにかく史料をよく調べて使うという実証的な方法が私のやり方でしたから、テーマを決めて論文を書く場合には、女性の分野というのは未開拓でやりやすかったのです。もちろん自分が女だったので、新しい自己確認の

観点からそれまでとは違った問題意識をもって研究に取り組むことができたというのは確かなのですが。エピクレーロス制度についての論文を81年に発表しましたが、それも75年の国際婦人年に啓発されて書いたもので、それ以上ではなかったのです。

そしてこの論文を書いた後、81年の9月にアメリカに留学しました。その時ジェイムソン夫妻がサンフランシスコ空港まで迎えに来てくれ、そのまま下宿に車で連れて行ってくれました。この下宿からスタンフォード大学の古典学科に自転車で通ったのですが、着いてから10日目くらいに、古典学科の近くのご丁寧にもチャペルの前でレイプ事件が起きました。被害者は学生寮で生活している女子学生でした。その時は、アメリカは怖い所だなと思っただけでした。スタンフォード大学の学生新聞には、キャンパス内でレイプ事件があって、被害者のケアが大切であると出たのですが、なぜか犯人像がはっきり書かれていませんでした。なぜだろうと思っていたら、また未遂事件が起きてついに似顔絵が出ました。それは黒人（当時はまだアフリカン・アメリカンという表現はなかったのではないでしょうか）の似顔絵でした。つまり黒人の扱いにひどく慎重で、犯罪行為と黒人を結びつけることを自制する傾向があって、すぐに似顔絵を出すとか、犯人は黒人であるなどという記事は出てこなかったのです。その時私は、アメリカはこういう問題あるいは悩みを抱えている社会なのだと気づきました。その点は日本社会にはないことでした。日本社会にも類似の問題はあるにもかかわらず、当時は自分たちの問題として捉えられてはいませんでした。悩みを抱えているというのは解決にそれだけ近づくことであって、問題があるにもかかわらず、それを悩みとして引き受けないのであれば、怠惰のそしりを受けても仕方ないでしょう。

この頃スタンフォード大学のキャンパスではレイプ反対の集会がたびたび開かれました。日本では当時レイプという言葉さえ口に出すのもはばかられる時代でしたから、私にとっては強いカルチャーショックでした。キャンパスではレイプ反対のシンボルである赤いリボンを学生や教師が身に付けて抗議の姿勢を示していました。古代ギリシアの韻文の授業を担当していたJ.ウィンクラー先生もゼミの時に赤いリボンを腕に巻いていました。彼が授業中にホメロスを朗々と歌い上げると本当に美しい響きで、しかも彼は華奢で姿も美しく、魅力的でした。あるとき仲の良かったPh. D. コースの女子学生が、おしゃべりの最中に、彼は間違いなくゲイよ、と言ったのです。そのとき私はゲイの問題とこのとき浮かび上がったレイプをめぐる問題に潜む差別とは、それぞれ無関係ではないということに気づきました。つまり、それは社会的にマイナーな存在、マージナルな存在として共有する社会構造上の問題点と言えばよいでしょうか。女性の抱えている問題は、黒人やゲイ、レズビアンの抱えている問題と共通しているところが大いにあると感じたのです。ですから女性をテーマにする時の私の姿勢というのはその時決まりました。メトイコイを研究対象としたのも、同じ問題意識からです。つまり古代ギリシアの女性に関する自分の研究を、もっぱら女性史の分野に属するものとは考えていないです。

クリオ： ということは、女性というよりもむしろ他者として捉えておられるということですか？

桜　井： 他者、それもマージナルな存在として。だから私にとっては市民団、成年男子そのものの研究はあまり関心がないのです。ただ宗教の問題は別です、全部を抱え込みますから。

クリオ： するとそれ以降の「古典期アテナイにおける市民にとっての他者」（1989年）を皮切りに『ソクラテスの隣人たち』（1997年）へと発展した他者研究も同じような背景から出ているのですか？

桜　井： 自分ではそう思っています。

クリオ： 欧米の研究者の中には自分自身がマージナルな存在で、だからこそそうした研究を行うという場合がありますが、先生ご自身にそういった意識があるのでしょうか？

桜　井： それはやはり女であることの不利、それも特に大学を卒業して社会に出てからの不利というのを感じてきました。大学までは男女ともに保護されていますが、社会に出てから女は生きにくいと実感しました。しかしアメリカに留学してすごく社会が違うと感じました。女性が解放されているというか、自分自身でいられるというか。視界がパーッと開ける感じだったのです。だから私は女子学生にはアメリカに留学しなさいと勧めました。逆に男性はアメリカに行くと苦労するだろうと思います。アメリカに行った時、日本社会では男はずいぶんスポイルされていると思いました。もちろん最近は日本もずいぶん変わったと思います。かつて男の子は勉強していい成績を上げ、いい会社に入れば誉められ、だから、勉強以外の事はしなくていい、会社に入ればモーレツ社員でいい、他のことは母親がするから、あるいは妻がするからという感じだったのではないでしょうか。アメリカに行って早々に起こったレイプ事件をきっかけにアメリカ社会を観察して、男女関係やマイナーな人々のあいだの共通項や社会全体の中での位置を、自分なりに構造的に分析して理解できるようになったのは、そうした自分の経験があったからだと思います。なお、J. Winkler 先生は *Constraints of Desire: The Anthropology of Sex and Gender in Ancient Greece*, 1989 といった著書や共編著 *Nothing to Do with Dionysos?*, 1990 など優れた仕事を残されましたが、惜しいことに 1990 年に亡くなりました。

日本の西洋古代史研究の現状について

クリオ： 日本の西洋古代史研究の現状について何かお考えがありますか？どういった課題があるのか、ということですが。

桜　井： 基本的には史料を読んで自分なりに古代ギリシアの歴史像を築くことが大切だと思います。その際一人一人が自分の問題として取り上げるべきで、欧米の研究者が書いた本や論文を読んで、それを少し按配し、自分なりに料理して自分なりの味付けをして発表するというのはもうやめたほうがいいでしょう。かつてはそういう研究が少なくなかったようですが。

私は先ほどお話したように、研究仲間がほとんどいませんでした。片山さんは結婚して研究をやめられてしまいましたし、桑原さんは亡くなってしまいました。幸い岩田さん、馬場さん、伊藤さんといった優秀な先輩方がたくさんいらして、彼らと接することでいろいろなことを学びました。しかしやはり同年輩の研究仲間がいないというのは、今考えると不幸なことでした。ですからアカデミック・コミュニティーというのを大切にしてほしいと思います。これには現在の仲間だけではなく、過去に研究していた先人達が含まれます。これまでの研究者達の研究を尊重しながら、同時に現在の研究仲間のコミュニティーを大事にすることが必要ではないかと思います。お互いに信頼を抱けるコミュニティーが築ければいくら批判し合っても平気です。

日本の学界では、自分が何を研究しているのかなかなか言わなかったり、発表してもほとんど反応がなかったり、批判であっても十分な準備をしていない思い付きみたいなものであったりすることがあり、何か問題を感じます。それは研究者としての未熟さだと思います。一人一人が十分に勉強して研究史を押さえ、先人達の苦労の末の研究成果が分かれば、自分

の周りの仲間も大事にするし、書いたものについても尊敬を持って接することが出来るようになります。そして、現在の研究室の院生たちのあいだにはそのような関係が形成されつつあるようで、頼もしく思っています。

それから私は留学をしてもらいたいと何度も言っていますし、勧めてもいます。そして実際に留学している人が何人もいますが、そうすることで欧米の研究者を含めたアカデミック・コミュニティーを作ってほしいと思います。

クリオ： 古代史と他の分野、たとえば近現代史との交流についてはどのように考えていらっしゃるのでしょうか？

桜　井： 私は東大の助手を 2 年勤め、それから北大の助手を 4 年やり、東京学芸大学に就職して 18 年そこにいました。その間、いろいろな分野の研究者との交流がありました。とても幸運であったと思います。特に東京学芸大学の歴史学研究室には日東西の研究者がいて、日本史が 4 人、東洋史と西洋史が 3 人ずつおり、その 10 人がとても密に交流を持ち、1 年に 1 回はみんなで旅行したり、学生との合宿があったり、教授会の後はみんなで研究室で飲んだりしました。この研究室のかなりの人たちは、いわゆる戦後歴史学を実践しているか、そういう傾向の研究を続けている優秀な研究者でした。そういう人たちから見ると、私の研究は、最初は、何やっているのだと思われたと思います。ままごとみたいで。そこでかなり鍛えられましたし学びもしました。他の歴史分野の研究者との交流はとても大切だと思います。もちろん古典学の哲学や文学の人たちとの交流も必要ですが。

この東大西洋史の研究室はとても長い伝統があり、日本の近代国家形成の過程と密着して存在してきました。良し悪しは別にして。ところが今や日本は欧米と肩をならべる大国になりました。そうした中で日本社会における西洋史研究の意義はかなり変わってきていると思います。しかし学問としての日本の西洋史学は、欧米とは違う視点からの研究を提示できるという点で大変重要だと思います。ですから、今後日本における西洋史学は、これまで以上に独自性を持つべきだと思います。これまでの研究の路線に従うのではなく、新しい研究を築いていく時期に来ていると思います。

Section3：教育について

クリオ： 今まで研究について語っていただきましたが、先生は研究者であると同時に教育者でもあるわけで、教育者としてゼミなどの指導で目指していること、学生に期待していることがあればお聞かせください。

桜　井： 先ほども触れたことですが、一人一人がアカデミック・コミュニティーのメンバーであるのならば、ゼミでの勉強は教師が教えて学生がそれを拝聴するというのではなく、ともに学ぶ関係だと思っています。私自身が未熟なところがあるので学生に教えてもらうことがたくさんあり、お互いに垣根を取り払ってともに切磋琢磨するという関係が望ましいと思っています。何でも思ったことを率直に言い合い、間違いを恐れずに議論し合うことが大切です。その時受け売りはせず、自分の頭で考えたことを述べ合い、それを批判し合うことが大事だろうと思っています。そして生きていくなかで生じる様々な問題を時代の問題と接合させること、社会が抱える苦悩を自分の問題として捉え、解決の方向を模索しようとする姿勢を心が

けていただきたいと思います。

クリオ： 最後にこれから歴史学を目指す人や後輩達にメッセージは何かありますか？

桜　井： 自分がこの年齢まで生きてきて思うのは、人間は逃れようなく歴史的に規定された存在だということです。文学や哲学は時代を超越して存在しうるという主張があるかもしれませんが、文学や哲学でさえ時代に規定されていると思います。そのような人間存在を規定する条件を対象とする歴史学というのは、他の学問に負けず劣らず人類の未来をよりよい方向へ導き得る、志の高い学問だと思います。しかし、歴史学はやはり科学ですから独りよがりではいけません。私は研究する際には、研究対象が社会全体の構造の中でどのように位置づけられるかを考え、説明することを心がけています。普遍性を持つ方法を自分なりに示し、それに基づいた研究をしていただきたいと思っています。科学は必ず乗り越えられるもので、時代が変われば学問の方法も変わります。しかし、研究対象とした時代の核心にどれだけ迫れるかは、その歴史家の腕力でも魅力でもあって、時代の核心を突いた研究は、たとえ時代が変わっても、過去の偉大な歴史家たちの仕事がそうであったように、色あせることなく、評価され続けるでしょう。そして、時代の核心に迫るためには、自分が生きている時代の矛盾を見抜く目を持つこと、時代の矛盾に敏感になることが肝要だと思います。ただ知的に面白い、という立場からの研究ではなくて、自分が生きる時代が直面する課題を自分のものとする姿勢が肝要です。その姿勢は意識的に築けるはずです。

クリオ： 今日はどうもありがとうございました。

2003年3月10日　於：西洋史学研究室別室（本郷）
訊き手：佐藤昇
協力：橋本資久・柳谷美智子・渡辺耕・クリオ編集委員

桜井　万里子（さくらい　まりこ）

1943 年東京生まれ。国際基督教大学、東京教育大学文学部を卒業後、1971 年に東京大学大学院人文科学研究科（西洋史学専攻）修士課程修了。東大助手、北大助手、東京学芸大学教授を経て、1996 年より東京大学大学院人文社会系研究科教授。

著書

1992　『古代ギリシアの女たち　アテナイの現実と夢』（中公新書　中央公論社）
1996　『古代ギリシア社会史研究　宗教・女性・他者』（岩波書店）
1997　『ソクラテスの隣人たち　アテナイにおける市民と非市民』（山川出版社）

論考

1973　「エレウシスの祭儀とアテナイ民主政の進展」『史学雑誌』82－10
1977　「古典期アテナイにおける女性の地位と財産権」弓削達・伊藤貞夫編『古典古代の社会と国家』（東京大学出版会）
1979　「アテナイのエレウシス併合について」『東京学芸大学紀要　第三部門社会科学』30
1980　「エレウシニア祭と二枚の碑文（IGI²5, ISS 10 A）」『史海』27
1981　「古典期アテナイのエピクレーロス制度とオイコスの存続」『史潮』9
1984　「エレウシスの秘儀とポリス市民」『史境』8
1984　「古代ギリシア・アーケイック期初期の植民活動　ギリシア人と先住民」『歴史と地理』345
1985　「古典期アテナイの国家祭儀と地方祭儀ーテスモフォリア祭についてー」『史潮』新 18
1986　「古代ギリシア女性史研究ー欧米における最近の動向ー」『歴史学研究』552
1986　「研究ノートー古代ギリシアのアテナイにおける姦通法」『東京学芸大学紀要　第三部門社会科学』38
1988　「ポリス社会における家族と女性」「古典期ギリシアの宗教と政治」弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ:古典古代の比較史的考察』（河出書房新社）
1988　「「雅量」の人・キモンーそのエートスのアテナイ民主政における位置ー」『ペディラヴィウム』28
1989　「古典期アテナイにおける市民にとっての他者—その他者認識の変容とトラシュブロスの第一決議」『歴史学研究』594
1994　「前 5 世紀アテナイの市民とメトイコイー政治モラルのダブル・スタンダードー」『東京学芸大学紀要　第三部門社会科学』45
1995　“A New Reading in POxy XIII 1606　(Lysias, Against Hippotherses)” *Zeitschrift der Papyrologie und Epigraphik*, 109
1998　「シチリア　異形のギリシア世界」『岩波講座世界歴史 4　地中海世界と古典文明』（岩波書店）
1999　「古代ギリシアの民主政を再考する」『史友』31
1999　「古代ギリシア史研究の新しい潮流」『思想』901
1999　「古代地中海世界」近藤和彦編『西洋世界の歴史』（山川出版社）
2000　「（コラム　歴史の風）ムネモシュネとアムネスティア」『史学雑誌』109－3

2002 "Studies on the hekatostai inscriptions (Rationes Centesimarum) in Japan", *KODAI: Journal of Ancient Hsitory*, 10 (1999/2000)

2003 「史料としての古典文献」『西洋古典学研究』51

2003 「ヘロドトスとトゥキュディデス―歴史叙述の誕生」『ムーサよ、語れ―古代ギリシア文学への招待』(三陸書房)

共著・監修

1997 『世界の歴史5　ギリシアとローマ』(中央公論社　共著)

1998 ロバート・モアコット (青木桃子訳)『古代ギリシア<地図で読む世界の歴史>』(河出書房新社　監修)

2003 J.M.ロバーツ (月森左知訳)『世界の歴史2　古代ギリシアとアジアの文明』(創元社　監修)

編訳

1987 A・モミリアーノ他『異端の精神史』(平凡社　分担訳)

1987 E.R.ドッズ他『進歩とユートピア』(平凡社　分担訳)

1999 O・マリー「理想の都市」『思想』901

2000 リュシアス『リュシアス弁論集』(京都大学学術出版会　分担訳)